

主 題：恵みシリーズ4、神であるイエス ～ 神であるイエスを拒む罪 ～
 聖書箇所：ヨハネの福音書 5章1－18節

ヨハネの福音書から神様の恵みということを繰り返し学んでいます。きょうは5:1からベテスダの池でいやされたひとりの病人の話を見てまいります。

ヨハネ5:1に「その後、ユダヤ人の祭りがあって、イエスはエルサレムに上られた。」とあります。みことばは何の祭りだったかを教えてはいません。しかし、この祭りの時に、主イエス・キリストがエルサレムに上って行かれた様子が記されています。そして、2節からベテスダの池におけるいやしの様子が記されています。2節「さて、エルサレムには、羊の門の近くに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があって、五つの回廊がついていた。」とあります。ベテスダの池は現在も遺跡として残っています。ここには北側と南側に二つの池があったと言われています。北側の池は50メートルプールを頭に描いてみてください。大体長さ50メートル、幅は40メートルありました。南側の池はそれよりひとまわり大きめで、大体長さが64メートル、幅が47メートルぐらいです。どうしてここに二つの池があったのかというと、それぞれ男女が別々のところで沐浴をするためであったと言われています。みことばには「五つの回廊」があったとありますが、五つの廊下があったのか、ある説によれば、この二つの池をさえぎるような形で一つの廊下が通っていたのではないとも言われています。いずれにしろ、今でもエルサレムに行くことのできるベテスダの池の話がここに記されています。

3節を見ると、そこにどういう人たちが集まっていたのか記されています。「3 その中に大ぜいの病人、盲人、足なえ、やせ衰えた者が伏せっていた。:5 そこに、三十八年もの間、病気にかかっている人がいた。:6 イエスは彼が伏せっているのを見、それがもう長い間のことなのを知って、彼に言われた。『よくなりたか。』」、これを見ると、たくさんの病人がそこにいたことがわかります。それには目的がありました。そのことを7節でこの病人自身が答えています。「:7 病人は答えた。『主よ。私には、水がかき回されたとき、池の中に私を入れてくれる人がいません。行きかけると、もうほかの人が先に降りて行くのです。』」。実は当時の人々はこういったことを信じていたのです。

新解約聖書の欄外を見ると、注が記されています。3節のところに「異本に3節後半、4節として……」と説明書きがされています。というのは、聖書を見ると、1－3節の次が5節になっていて4節がとんでいます。なぜこういうことになっているかということ、信頼できる古い写本の中にこの箇所が含まれているものと含まれていないものがあるのです。そこで、この訳者は欄外のところにこういったことが記されているのもあるのだと記しているのです。この欄外を読むと、「彼らは水の動くのを待っていた。主の使いが時々この池に降りて来て、水を動かすのであるが、水が動かされたあとで最初にはいった者は、どのような病気にかかっている者でもいやされたからである」とあり、なぜここに病人がたくさん集まっていたのか、その理由を見て取ることができます。

そして7節を見た時に、38年間病で苦しんでいた人が「水がかき回されたとき、池の中に私を入れてくれる人がいません。」、私が行ったらもう既に誰かが入っているのだと言った理由がわかります。その当時多くの人がそのことを信じて、たくさんの病人がベテスダの池の周りに集まっていました。

A. いやしの主 2－9a節

実は、きょう私たちが見ているヨハネの5章も神様のすばらしいご恩寵というものを我々に明らかにしてくれています。神の愛とその恵みがこの箇所にあふれています。どのようにイエス様がこの病人を愛されたのか——。どのようにイエス様がイエスに反対した人々を愛されたのか——。どのように彼らをあわれまれたのか——。そのことがこの箇所に出て来ます。2－9節を見ると、主はいやし主であるということが記されています。

1. 主は彼の必要を知った 6節

もう一度6節を見ていただきたいのですが、「イエスは彼が伏せっているのを見、それがもう長い間のことなのを知って、彼に言われた。」とあります。主イエス・キリストはベテスダの池に行かれました。みことばが言うように、たくさんの病人たちがそこにいたのです。そしてイエス様はそこで伏せっているひとりの男を見て、あの人はなぜあそこに伏せっているのだ、どれぐらいの間伏せっているのだという質問をしていません。イエス様はその伏せっている彼を見て、もうそれが長い間であることを既にご存じであったことをみことばによって知ることができます。彼のことをだれに尋ねてもいないし、彼のことをだれにも相談していません。しかし、それでいながらイエス様はごらんになった時に、彼の必要が何であるかを既にわかっておられた。それは主イエス・キリストが神だということを明らかにしています。

ペテロは神について使徒15:8で「人の心の中を知っておられる神」とほかの弟子たちに伝えました。神は私たちの心のすべてのことを知っておられるお方だと。パウロも1コリント4:5で「主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごと明らかにされます。」と言います。パウロは主はだれも見えないと思うようなことすべて見ておられる。心の中で考える、計画するすべてのことを神はご存じである、それが神なのだと言うのです。私

たちが手を合わせて来た存在とは全く違います。詩篇のみことばが私たちに教えるように、私たちがこれまで神として崇拝して来たものは、「口があっても語れず、目があっても見えない。耳があっても聞こえず、鼻があってもかげない。手があってもさわれず、足があっても歩けない。のどがあっても声をたてることもできない」(詩篇115:5-7)存在で、それは神ではない。神というお方は私たちが説明をしなくても我々の心の隅々までご存じです。神様はあなたのすべての必要をちゃんと見て、それを知っておられるとみことばは私たちに教えてくれます。先ほどの詩篇115篇のみことばの中で、この著者は「私たちの神は、天におられ、その望むところをことごとく行なわれる。」(詩篇115:3)と言います。なんと偉大な神様でしょう。この方は神ゆえに、すべての主権者ゆえに、だれの助けも必要としない。彼はご自分のご計画に基づいてすべてのことをしておられ、私たちの助けも私たちの知恵も必要としないのです。この方は神だ、死ぬことなく永遠に生きておられる方だと。

イエス様はこの男を見て、この男の必要を即座に知りました。そしてこの男性のところにイエス・キリストは出て行かれるわけです。聖書が私たちに教えてくれる神様というのは、すべてのことをご存じであり、そして愛とあわれみにあふれたお方です。先ほども言いましたように、この男性がイエス様を呼んだのではなかったのです。イエス様がこの男性のところに出行くのです。たくさんの病人の中で、主イエスはその男性を見て、そしてその男性の中に必要があることをちゃんと見きわめた上で、そこに行き行って助けをお与えになるのです。そうやって主はあなたのところにも来てくださったのです。たくさんの人々の中で主はあなたをごらんになり、あなたのところに来てくださり、あなたの必要を見て、あなたの必要にこたえてくださった。神は彼の必要をご存じであったように、あなたや私の必要をご存じです。それが神だとみことばは私たちに教えます。

2. 主は彼に尋ねられた 6節

6節でイエス様は「よくなりたいか。」と彼に質問しておられます。健康になることを望むかと彼に問われたわけです。少し考えてしまうのは、よくなりたから病人はそこにいたわけです。今見て来たように、水がかき回された時に最初に降りていったら病気が治ると信じてそこにいたというのは、病気が早く治って健康になりたいと思っていたからです。重々承知であることをなぜイエス様はわざわざお聞きになったのかです。なぜわかり切っていることをイエス様はお聞きになったのか——。二つの理由が考えられます。

① 心から感謝を捧げる者となるため 14節

一つは、このように問いかけて、彼が「そうです、私はよくなりたいたいです」と言って、その祈りが聞かれ、そのいやしがなされた時に、彼は間違いなく心から神様に感謝を捧げます。実際にこの人物が感謝を捧げている様子が14節に出て来ます。「その後、イエスは宮の中で彼を見つけて言われた。」と。このいやされた人物は神への感謝を表すために宮の中にいたのです。ですからイエス様はあえてこの人物に「よくなりたいか。」と聞くのです。そして彼がよくなった時に、彼は神の前に大きな感謝を表すのです。恐らくそれが彼にこのような質問をされた一つの理由でしょう。

② 人には選択の責任があるため

もう一つ考えられる理由は、人間には選択の責任があることを明らかにするためです。イエス様はあなたが望まないことをなさらないということです。主イエス・キリストは確かに救いにおいて、救いを備えてくださり、あなたがその救いに至るようにその道を設けてくださいました。でももしあなたがその道を拒み続けているならば、救いに至ることはありません。だから、地獄に行った人々がだれかのせいで私は地獄に来たのだと言える人はいないということです。みんなそれぞれどのような選択をするのかです。神の前に正しい選択をするのか、それとも神の前に誤った選択を継続するのかです。その責任はすべて我々にあるのです。決してだれかのせいにすることはできないのです。

3. 主は彼をいやされた 7-9節

そして三つ目に私たちがここで見るのは、主は彼をいやしておられること、それが7-9節に出て来ます。「7 病人は答えた。『主よ。私には、水がかき回されたとき、池の中に私を入れてくれる人がいません。行きかけると、もうほかの人が先に降りて行くのです。』8 イエスは彼に言われた。『起きて、床を取り上げて歩きなさい。』9 すると、その人はすぐに直って、床を取り上げて歩き出した。』

① 「ことばでいやされた」 7-8節

ここにイエス様のいやしが記されているのですが、驚くべきはイエス様のいやしの方法です。イエス様はこの人物の体に触れて何かをなさったわけではない。泥を作って塗ったわけでもない。何をしたかという、イエス様はことばをかけたのです。つまりこの病人はことばでいやされたのです。今お読みしたように、この病人は行かないによっていやされるということしか知りませんでした。最初に池の中に降りたら病気が治ると。そんな彼に対してイエス様が言われたのは、「起きて、床を取り上げて歩きなさい。」と、床を取り上げなさい、そして歩きなさいとすべて命令形で記されています。イエス様はこうして命じられたのです。何が大切だったのか——。それはイエス様が言われたことを信じるかどうかでした。彼はさっきの自分自身の証を7節に記していますが、それを見る限り、彼は自分ですぐに立ち上がってどこかに移動することができたわけではありません。彼が言ったように、池の中に私を入れてくれる助けが必要なことを明らかにしています。ですからこのような命令を受けた時に、彼は

「イエス様、それは不可能です。ひとりで起き上がることができないのです。」と思ったかもしれない。人間的に考えたら不可能なことを言われたのかもしれない。しかし、この人物はそれを信じてそれを行なうのです。その時彼は長年苦しんで来た病からのいやしを体験したのです。

この出来事は、これらのことを明らかにしています。

- ・ 主イエスには病をいやす力がおありだということ。
- ・ イエスのことばにはその力があるということ。

イエス様はこのように起きて床を取り上げて歩けと言われた。そしてその通りになったのです。それを実践した時にこの人物はその病からいやされた。神がこの世界をどんなふうにお造りになったのか思い出してください。神が「光よ。あれ。」と言われたら、「光ができた。」と。神様の御力を見る時、そのおことばにそれだけの力があることを私たちは知っています。イエス様はここで何か特別な行ないをしたのではない。イエス様は床を上げて歩けと言われ、彼はそれを信じてこのいやしを体験した。だから我々は神様のことばに信頼を置くのです。それは必ずしもあなたが望んでいることを神がしてくださるという約束を与えてくれているのではない。みことばの約束はあなたに必要なものを与える、主のみこころをなすと教えてくださった。しかし少なくとも神が言われたことは信じるに値するものです。神はできないことを約束されるのではない。できることを約束してくださった。神が言われたら、これは全能なる神様の言われたことだから我々は信じるのです。

② 「安息日にいやされた」 9節

ところが問題があったことがみことばに記されています。9節「ところが、その日は安息日であった。」と。このいやしがなされた日が安息日だったというのです。金曜日の日没から土曜日の日没までです。この床を取り上げることがだめだと言うのです。10節「そこでユダヤ人たちは、そのいやされた人に言った。『きょうは安息日だ。床を取り上げてはいけない。』」、つまり、床を取り上げるといふ行為が労働とみなされたわけです。この「床」というのは、私たちが思う布団でもないし、マットレスでもありません。わらで作った非常に簡易なもので、どこにでもそれを持って行って寝ることができたわけです。ですから動かすのは非常に簡単なのです。しかしユダヤ人たちは、それは労働だから床を取り上げてはいけない、それは律法に反することだからそれをしてはいけないと言うわけです。

4. 主は彼に忠告を与えた 11-14節

そして、その後イエス様がこの人物に対して忠告を与えます。おもしろいのは、11節を見ると、彼自身だれが自分の病をいやしてくれたのか知りません。11節「しかし、その人は彼らに答えた。『私を直してくださった方が、「床を取り上げて歩け。」と言われたのです。』」12 彼らは尋ねた。『「取り上げて歩け。」と言った人はだれだ。』」13 しかし、いやされた人は、それがだれであるか知らなかった。人が大ぜいそこにいる間に、イエスは立ち去られたからである。」。一体だれがそのように命じたのか彼は知らなかった。

今度イエス様が彼のところにやって来て、イエス様の方で彼を見つけて忠告を与えているのが14節です。「その後、イエスは宮の中で彼を見つけて言われた。『見なさい。あなたはよくなった。もう罪を犯してはなりません。そうでないともっと悪い事があなたの身に起こるから。』」と。この忠告のことばは非常に大切です。まず「もう罪を犯してはなりません」と、これを現在形で書いてあります。ということは、継続して行ない続けている罪に対して、主はそれをやめなさいと命令しています。その後、接続詞「そうでないと」とあります。もう罪を犯してはならない理由を説明しています。「もっと悪い事があなたの身に起こるから」というのが理由です。だから罪を犯し続けてはいけない、罪を継続して行なっていてはいけないとイエス様は言われたわけです。この38年間病で苦しんでいた人物の病は彼の罪と関係していたのです。だからイエス様はもし罪を継続して行なうのだったら、今よりもっとひどいことがあなたの身に起こると。そうしてイエス様はあなた自身が煩ってきた病は、あなた自身の罪に原因があるのだから、その罪から離れるようにと言われるのです。

皆さんご存じのように、すべての病がその人の犯した罪が原因だと聖書は教えていません。多くの愛する兄弟姉妹たちがいろいろな病を経験します。それは、あなたが罪を犯したからと聖書は教えていません。例えばこの後に出て来るヨハネ9章で全盲の人がいます。人々は彼が全盲に生まれついたのは、彼が罪を犯したからですか、親が罪を犯したからですかと聞くわけです。イエス様は9:3で「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるため」だと答えます。ですからきょう私たちが見ているように、罪が原因で病に陥った人もいますし、それとは全く関係なく病に陥った人もいます。みことばは私たちに教えています。

さて我々はこのいやしの出来事を見て来たわけですが、主はこの人物に対して深いあわれみを示されました。イエス様ご自身が出かけて行かれた。イエス様ご自身が彼を選んでくださった。だから私たちはそのあわれみによってあがなわれた者として、その神様の恵みを、そのあわれみというものを心から感謝することが必要です。前回見たように、礼拝は神がなさったみわざに対して、神ご自身に対して私たちの応答であり、神はすべての栄光をお受けになるにふさわしい方です。この偉大な神が私にこんなにすばらしいみわざをなしてくださった。ですから私たちはそれに応じて神様をほめたたえるわけです。きょう皆さんは何かをいただくために来られたのではなく、感謝を持って、喜びを持って、賛美を持ってこの場に集まって来られたはずで。そうして私たちは賛美を持って、捧げ物を持って、そして私たちのうちなるすべてをもって、神様あなたはずばらしい方です、あなたは偉

大な方です、あなたはすべての栄光に値しますと言ってその方をほめたたえる、その思いを持って皆さん集まって来たはずです。その思いを私たちは失ってはいけないのです。我々は常に神がどんなことをなしてくださったのか思い続けることです。このひとりの病人に対しても主はこのようにあわれみを示してくださった。そしてこの神様のあわれみは彼にとどまったのではない、イエスに逆らう者たちに対しても示され続けています。

B. 神である主 17-18節

続けてみことばを見てください。15節「その人は行って、ユダヤ人たちに、自分を直してくれた方はイエスだと告げた。」、だれかわからなかったのにわかったのです。安息日に私の病をいやしてくれたのはイエス様だと。そして16節「このためユダヤ人たちは、イエスを迫害した。イエスが安息日にこのようなことをしておられたからである。」と。

そしてこの17-18節に私たちはイエスを殺そうとしている者たちに対する主イエス・キリストの深い愛と恵みを見ることになります。17節を見ると、「イエスは彼らに答えられた。」、イエスを迫害した者たちであり、イエスを殺そうとしていた者に対して、イエス様は「わたしの父は今に至るまで働いておられます。ですからわたしも働いているのです。」と言われます。恐らくこの箇所をお読みになってなるほどそういうことか、何を言いたかったのかすぐにくみ取られた方はそんなにおられないかもしれません。でも我々が見なければいけないのは、その当時イエス様のこの話を聞いたユダヤ人たちがどのように反応したかです。18節「このため」、イエス様がこう言われたゆえに、ユダヤ人たちは「ますますイエスを殺そうとするようになった。」と書いてあります。これまでも殺そうとしていたけれども、この話を聞いてもっと彼を殺そうと思ったと。そしてその後理由が記されています。「イエスが安息日を破っておられただけでなく、ご自身を神と等しくして、神を自分の父と呼んでおられたからである。」と。驚くべきことは、このイエス様の話を聞きたいユダヤ人はイエス様が言いたかったことを正確に理解したということです。

ぜひ四つのことばに注目してください。一つ目は17節に出て来る「働いておられます」ということばです。非常に大切なことばです。二つ目は18節の「破っておられた」ということばです。三つ目は18節「ご自身を神と等しくして」の「して」ということばです。最後18節の終わり「神を自分の父と呼んでおられた」の「呼んでおられた」ということばです。この四つは全部動詞です。この箇所を理解するためにはとても大切なところです。順番に見て行きましょう。

1. 「働いておられます」 17節

まず最初に17節でイエス様は「働いておられます」と言われた。「わたしの父は今に至るまで働いておられます。」、これがイエス様自身が安息日にこの病人をいやした理由だと言っています。父が働いておられるように、私も働いただけなのだと言われたのです。ユダヤ人たちにはよくわかりました。ここでイエス・キリストはご自分を神と等しい存在としているということ、神を冒瀆しているのだと。なぜなら人間でありながら、自分を神としていると言って、イエスを殺そうとしたのです。このことはこのヨハネの福音書の中であと2回繰り返されています。ヨハネ8:59にも、10:31でも人々はイエスを殺そうとした。なぜかという、イエスは神を冒瀆していると。人間でありながら自分を神としているから。こうして人々がイエスを迫害した様子が記されています。今皆さんにぜひ覚えていただきたいのは、今の私たちがどう思うかではないのです。その当時の人々はこの17節のイエスの話を聞いた時に、主イエス・キリストは自分が神であるということを明らかにしたと理解したのです。自分のことを神としていると、そのことに気づいたのです。

この17節で「わたしの父は今に至るまで働いておられます。」とあります。確かにそのとおりなのです。今でも神様は休むことなく人々にさまざまな恩恵を与えておられる。自然の恩恵もそうだし、いろいろな自然の祝福を神様は与えてくださっています。例えば神が「きょうは安息日だから太陽を上げるのをやめましょう」とか、「きょうはちょっと疲れているから月も上がりませんよ」と、そんなことがあつたらどうなります？神様は皆さんに働いて、皆さんの必要を満たし続けてくださっている。我々は常に神の前に助けを求め続けています。その神が「ちょっとごめんね、きょうはちょっと留守するので、あなたの祈りもきょうは聞けないから、きのうまで助けてあげたけれども、きょうは助けることできない」と、もし言われたとしたらどうでしょう？つまり、神は休むことなくずっと働き続けておられるのです。神はあなたに常に恵みを与え続けてくださっている。神は常にあなたを支え続けてくださっている。神は常にあなたの必要を満たしてくださっている。神は常にあなたの祈りを聞き続けてくださっている。神には休息がないのです。だからイエス様は言われたのです。私の父は今に至るまで働き続けておられます。現在形です。私の父は安息日であろうと何の日であろうと休むことなく働き続けておられますと。その神と私は同じなのだと言われたのです。

だからイエス様自身もきょうは安息日だから正しいことをしません、きょうは安息日だからこれやりたいけれどもやりません、なぜそんなことができましよう。私の父がずっと働いておられるように私もずっと働き続ける。人々に祝福を与え続け、人々に恵みを与え続けると。イエス様がここで言われたことは、休まず働いておられる神と私が同じ存在だから、私が同じように神だから、その父と同じように私は働き続けるのだということです。だから、それを聞いていたユダヤ人は、これは神に対する冒瀆だと言ったのです。メッセージを彼らは正しく理解したのです。

確かに私たちの周りにイエス・キリストが神であるということを否定する人々がいます。そういう教会が存在したり、そういうところからやって来る人が皆さんの家を訪問するかもしれない。彼らはイエスは神ではないと言う

のです。でもみことばを見ると、イエス様はご自分が神であるということを明確に人々の前に明らかにして来られた。彼らがどう否定しようと、彼らユダヤ人の反応を見たらイエス様が言われていたことははっきりしています。イエス様はご自分が神であることを隠したのではない、ご自分が神であることを明らかにされたのです。それで、ユダヤ人は彼を迫害した。このようにイエスの神性を、イエスが神であることを否定する人々はこのことを覚えなないといけません。それは何かというと、イエス様は神でないと言う人々がもしそう主張するならば、神でないのに神だと言ったのだからイエスは偉大さつきであったということになります。イエス様は神と言ったけれども、イエス様が言われたことはうそのだ、だってイエス様は神ではないから。それが彼らの主張なのです。どれほど真理から外れているでしょう。みことばはちゃんと私たちにこの方はまことの神であることを明らかにしています。そのことはその後にも出て来ます。まずイエス様はここで私の父は今に至るまで働き続けておられるように、神である私も同じように働き続けるのだと言われたのです。

2. 「安息日を破っておられた」 18節

二つ目に安息日を破っておられたということが18節に出て来ました。この「破っておられた」というのは現在形ではなくて未完形なのです。ということは何を意味しているかということ、イエス様は1回だけ破ったのではなく、ずっと破り続けていたと言うのです。イエス様は安息日を破り続けておられたのです。それを見たユダヤ人、特に律法学者、パリサイ人たちは彼は律法を汚している、律法を破っていると言うわけです。果たしてイエス様は安息日を破ることによって律法に逆らうことをなされたのでしょうか？いいえ、主イエス・キリストは安息日を破ることによってパリサイ人たちの過ちを明らかにしたのです。このユダヤ教の教師たちの過ちというものを明らかにしたのです。

少しややこしいですが、ユダヤ人たちの間には二つの教えがありました。一つは成文の教え、文章にされた教えでモーセ五書です。創世記から始まって五つの本、このモーセ五書が彼らが文章にして信じていたものです。それだけではなく口伝律法とか口伝の教えというのがあります。つまり口で伝えられた教えです。なぜ彼らはこの二つを持っていたのかということ、書かれた律法を読む時によく意味がわからないことがあると。その一つは安息日です。出エ31:15に「安息の日に仕事をする者は、だれでも必ず殺されなければならない。」とあります。そうすると、どんな仕事だめなのだろうとみんな考えたわけです。そして彼らは39のしてはならない仕事を作って、それをことばで伝えた。それが口伝律法とか口伝の教えです。以下がその39のしてはならない仕事です。

「種蒔き、耕作、刈り取り、穂をまとめること、脱穀、あおぎ分け、剪定、粉ひき、ふるいにかけること、生地こね、パン焼き。羊の毛を刈ること、脱色、毛をすくこと、染色、糸紡ぎ、縦糸を織機に掛けること、織り端の房を二つ作ること、糸2本分を織ること、(縦糸の)二本を分けること、結び目を作ること、解くこと、二針縫うこと、二針縫うための布を裂くことである。牡鹿を狩ること、それを屠畜すること、皮を剥ぐこと、(肉に)塩を振ること、皮をなめすこと、(毛を)搔くこと、切り裂くことである。アルファベットの二文字を書くこと、二文字を書くために字を消すこと、建てること、取り壊すことである。火を点けること、消すこと。金槌で叩くこと、ある一つの場所から別の場所に物を移動させることである。」(Mシャバ7・2 タルムード入門Ⅱ p.74)

最後のところに、「ある一つの場所から別の場所に物を移動させること」、これを仕事とみなしてユダヤ人たちはそれをしてはいけないと言ったのです。なぜなら彼らはこの教えを信じていたからです。非常に大切なことは、この成文化された教えがあります。律法があります。サドカイ人たちは書かれた文章だけを信じたのですが、律法学者、特にパリサイ人は今言ったような理由で、ことばで伝えられた教えも実は書かれた教えと同じほど価値があると信じたのです。これが問題を引き起こしたのです。神のことばでない人間の解釈もまさに神からのメッセージであると、彼らは信じたのです。こういう世界に彼らはいたということです。

☆ 安息日は元来「人間のために設けられた」ものであった。

では安息日とは一体何だったのか。イエス様が教えようとしたのは、このパリサイ人たちが間違っているということでした。というのは、安息日というのはもともと人のために設けられたものだったからです。イエス様はそのことをマルコ2:27で「安息日は人間のために設けられたのです。人間が安息日のために造られたのではなく、人間が安息日のために造られたのではありません。」とされています。

① 休息のため 創2:2-3

安息日が人間のために造られたというのはどういう意味かということ、一つは安息日というのは休息のために人間に与えられたのです。先ほど見たように、神様は休息を必要としないのです。神は六日間の創造のみわざをなさって、疲れたから七日目休みますではないのです。神には休息は必要ない、でも我々には必要なのです。そこで我々のために一日休息を取りなさいと安息日が設けられたのです。

② 創造主なる神に礼拝を捧げるため マルコ3:4;ルカ6:9

もう一つの理由は創造主なる神様に礼拝を捧げるためなのです。その日に主を信じる者たちがともに集まって心からの礼拝を捧げ、そして主にある交わりを楽しんだのです。六日間の忙しい仕事から解放されて、私たちが愛し、我々を救い、私たちを守り支えてくださっている神をあがめるために人々はともに集まる、そのために安息日が設けられたのです。ですから本来ならばこの日は神様に人々が感謝を表す日であり、喜びを表す日であ

り、素晴らしい日だったのです。

ところがユダヤ教のリーダーたちがさまざまな人間の教えを加えることによって、その日が人々にとって非常に重荷となって行くのです。イエス様は安息日に神の前に正しいことをなされたのです。善を行なわれたのです。人をいやすことは正しかったのです。だからイエス様は安息日に善を行なうことは正しいことかと繰り返し人々に問いかけておられる。マルコ3:4に「安息日にしてよいのは、善を行なうことなのか、それとも悪を行なうことなのか。」、ルカ6:9でも「あなたがたに聞きますが、安息日にしてよいのは、善を行なうことなのか、それとも悪を行なうことなのか。」と。いつの間にかこのリーダーたちは喜ぶべきこの安息日を変えてしまったということです。そこでイエス様は彼らの過ちを明らかにされたのです。

安息日は元来そんな目的ではなかった。この日は素晴らしい主をたたえる日であったと、本来なら人々が安息日にすべきことは神が喜ばれることです。人々は安息日は何をしてはならないかを考えるのではなく、特に主のために何をすべきかを考えることが大切なのです。もちろんそれは私たちの毎日の生活もそうです。神が喜ばれることを考えて行く。しかし、我々は今、このユダヤ人が守って来た金曜の晩から土曜日の日没までの安息日を守っていません。我々は復活されたイエス・キリストを祝ってその方を礼拝するためにこうして集まって来ています。でも大切なところはよく似ています。私たちはこうして個人でも礼拝するのですが、ともに集まってこの神をあがめようとします。ともに私たちが集まった時に個人がそして全員でたたえ合いながら、主のすばらしさを証しようとしています。だから私たちもこの日に何をしたいのか、何をしてはいけないのかということよりも、どうしたら神を喜ばせることができるのか——。そのことを考えてその日を過ごすことが必要でしょう。イエス様はそのことをパリサイ人たちに、特にこのリーダーたちにお教えになった。

3. 「ご自身を神と等しくして」

三つ目、18節を続けて見てください。「ご自身を神と等しくして」とあります。この「等しく」という形容詞は「同等である」とか「同じの」という意味です。等しく対等であるものとの関係を表しています。それが数であったり、大きさや質、特質においてであっても対等である、等しい、同一である、そういうことばをここで使っています。だからメッセージはイエス様のご自分を神と等しくしていたと人々は言ったのです。イエス様の主張はこの全能なるまことの神様と私とは本質において全く同じだということを示したということです。確かにイエス様は私たちと同じように御からだを持っておられた。しかしイエス様が言われたのは、本質において私は神なのだということを明らかにした。それを聞いた人々は、この人は人間でありながら、自分を神と等しくしていると言って殺そうとしたのです。それがイエス様の主張だったのです。

4. 「神を自分の父と呼んでおられた」

最後に四つ目「神を自分の父と呼んでおられた」と。これも未完形で継続してそのようにイエス様が呼んでおられたということを示しています。私たちの父と言わずに私の父とイエス様は言われたのです。17節でもそのように呼んでいます。特別な関係があることを明らかにされたのです。私たち人間が持つことができないような、特別な関係です。ですから、このイエス様とユダヤ人たちの会話を見る時にユダヤ人がなぜイエスを殺そうとしたのか、その理由がここに記されていました。イエスはご自分を神と主張されたゆえに、人々は彼を殺そうとしたのです。

ぜひ見ていただきたいのは、なぜこのユダヤ人は、このいやされた男を殺そうとするのではなくて、イエスを殺そうとしたかです。イエス様が何か間違ったことをしたかというところではなかった。よいことをなされたのです。この人を助けられたのです。ところがユダヤ人はますますイエスを殺そうとしたと。まさにここに罪人である人間の心を表していませんか？神を憎んでいるのです。神様の恵みに対して彼らはどのように応答するか——。それを拒み続け、その恵みの主をも拒み続け、神ご自身を拒む。このようにして人間は、罪に罪を重ねている様子をこの箇所からも見ることができます。

今日のレッスンを私たちは見て来ました。病がいやされたひとりの男性がいました。彼はイエス様が言われたことをそのまま信じ、主の御力を体験しました。イエス様の教えはクリア、明確でした。イエス様は人々の前でご自分が神であることを明らかにした。しかし人間はそれを否定するのです。人間はそれを拒むのです。この中でそれを拒んでおられる方はいませんか？感謝なことに、あなたも私もこの神の前に助けを求めに行った時に神は助けてくださいました。あなたが神の前に主よ、罪を赦してくださいと救いを求めた時に、神はちょっとしばらく考えられると言われなかった。神はあなたをこの素晴らしい救いの中に迎え入れてくださった。こんな恵みにあふれた神様がおられるのです。我々のような罪にあふれたものを神は喜んで受け入れてくださり、罪をきよめてくださり、救ってください、新しく生まれ変わらせてくださる。だから私たちはこの方をほめたたえるのです。だから私たちはこの方をたたえるのです。こんな私を救ってくださいましたゆえに、こんな私をこんなにも愛してくださいましたゆえに、こんな私にこんなに素晴らしい恵みを下さったゆえに。そしてこの方が私たちを造ってくださいましたまことの神ゆえに、私たちはたたえるのです。この人物に対してもそうでした。イエス様を殺そうとしていた人々に対しても、このような恵みを、愛を示されました。もっともっと感謝が必要です。私たちの感謝は、私たちの生き方をもって表すのです。主のみことばに従うことです。少なくとも我々信仰者は神が言われたことは必ずそうなることと信じて、それに従

って行くことです。そのような信仰を神は喜んでくださる。

どうぞイエス様をお信じになっている皆さん、そのように歩み続けてください。神が言われたことを私は信じます、そしてこの主によってあがなわれたことを感謝しながら生きていきます。またもし救いの確信のない皆さんがおられたら、主はあなたを拒んでおられるのではない。あなたが主を拒んで来たのです。罪を悔い改めて主に救いを求めて出て来ることです。主はあなたにその救いを下さる。「よくなりたいか」——。主よ、私は罪赦されて新しく生まれ変わりたいです。その時に主はそれを与えてくださる。

《考えましょう》

1. 主が、長年病に苦しんでいた男をいやされたのは、どうしてだと思いますか？
2. どうして主は安息日を破られたのでしょうか？
3. ユダヤ人たちが、主イエスを殺そうとしたのはなぜでしたか？
4. 主イエスが「神」であることは、どうしてわかりますか？